資料館ノート　第 117 号　　平成 28 年 9 月 16 日発行

歌舞伎と深川③

市川團十郎と深川

江東区深川江戸資料館

図1　「成田山出開帳図」　歌川豊国画　江戸時代後期　早稲田大学演劇博物館蔵　中央で三宝を持つのが七代目團十郎

「江戸の守護神」、「役者の氏神」といわれた市川團十郎は江戸歌舞伎を代表し、さらに江戸の人々が理想とする「江戸っ子」として、江戸の象徴でした。

團十郎が役者の中でも別格の存在となった理由は代々がそれぞれに工夫し、卓越した芸を磨く力量があった事です。また祭祀、呪術的な要素が強い「荒事（あらごと）」を芸の根幹として現人神（あらひとがみ）を演じ、それを初代から現代まで家の芸として継承するなど、團十郎ならではの文化・特色を絶対的な立場で確立していることなどが挙げられます。今回は深川と團十郎のつながりを、四代目、七代目との関わりを中心に見ていきます。

1　成田山信仰と團十郎

(1) 初代團十郎と成田山

祭祀性の高い荒事には、團十郎の信仰の深さが関わっています。團十郎と成田山の関係は、後継ぎである子宝に恵まれなかった初代（1660 ～ 1704）が成田山に祈願したことがはじまりとされます。その後、授かった二代目（1688 ～ 1758）は「不動の申し子」と言われ、元禄 10 年（1697）中村座の「兵根元曽我（つわものこんげんそが）」が 9 歳の時の初舞台となり、不動明王を演じました。この狂言は初代の自作自演で、團十郎自ら宗教性の高い荒事を創作していたことも他の役者には無い大きな特色です。この狂言は大評判を呼び、成田から多くの信者が訪れ、舞台に投げられた賽銭（さいせん）は十貫文に上ったと言われます。成田山へ御礼参りに團十郎親子が訪れた後、市川團十郎家の屋号は「成田屋」になりました。

(2) 深川永代寺での成田山出開帳

成田山新勝寺の中興の祖である照範（しょうはん）上人が、新興都市・江戸での布教活動をはじめたのは元禄年間（1688 ～ 1703）の事です。その中心となったのが、出開帳です。初回は元禄 16 年（1703）深川永代寺で行われました。成田山の江戸出開帳は 11 回ありましたが、その内の 10 回が富岡八幡宮の別当寺である深川永代寺で催されました。

深川が明暦の大火（1657）後、拡大する江戸の町を担う新興地として本所と共に開拓されたのも同じく元禄年間です。隅田川に永代橋が架橋され、江戸の中心部との往来が格段に便利になり、江戸の中心部を支える猟師町、蔵の町、木場などの産業、さらに富岡八幡宮を中心とする江戸近郊の行楽地になる大

きな発展期に当たりました。

永代寺ではじめて行われた成田山出開帳に合わせて團十郎は森田座で「成田山分身不動」を二代目と共に演じ、出開帳の宣伝役を担いました。その後も代々の團十郎は、深川での出開帳に合わせて成田山に関する狂言を演じました。さらに永代寺で取り持ち役（世話役）を務め、多くの人々を呼び込む大きな原動力となりました。図1は、永代寺での出開帳で取り持ちをする七代目團十郎（中央）と境内の賑わいを描いています。永代寺には空き地がなくなる程、奉納物が寄進されたといわれます。

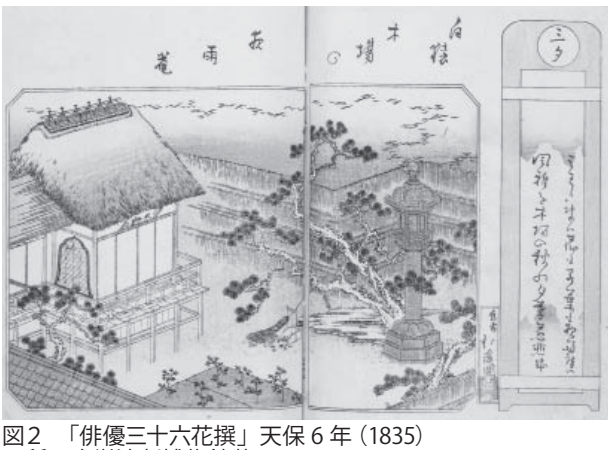

図2　「俳優三十六花撰」天保 6 年（1835）
早稲田大学演劇博物館蔵

2　團十郎が住んだ木場

(1)「木場の親玉」の別荘

團十郎の芸の中心であった荒事のみならず、リアルな感情表現を表す実事（「仮名手本忠臣蔵」の大星由良之助など）などの新しい時代の歌舞伎を取り入れた四代目（1711 ～ 1778）が深川島田町（現在の江東区木場 2-11-13 付近）の別荘に神田から移り住んだのは明和 2 年（1765）以降と言われます。

四代目は引退後、「修行講」という役者のための勉強会を作りました。修行講は團十郎家の結束さらに、一門における後継者の育成など、当時としては他に例を見ない先駆的な活動といえます。参加したのは弟子である八百蔵、雷蔵、高麗蔵、さらに息子である五代目團十郎などで、互いに意見を出し合い、切磋琢磨しながら團十郎の芸を継承する場となりました。四代目は面倒見が良く、親分肌だったため、多くの弟子たちに慕われ「木場の親玉」と呼ばれました。

(2) 天保の改革と七代目團十郎

四代目團十郎以降、代々の團十郎は木場に暮らしました。七代目（1791 ～ 1859）は江戸歌舞伎の絶頂期、また江戸の庶民文化の爛熟期でもある文化・文政期（1804 ～ 1830）を中心に活躍しました。

團十郎家の代表的な狂言を「歌舞伎十八番」として制定し、「勧進帳」の初演、さらに深川を舞台にした四世鶴屋南北の生世話物の傑作「東海道四谷怪談」で民谷伊右衛門を演じるなど、当時の江戸歌舞伎の中心でした。

七代目は天保の改革時、身分不相応の贅沢な生活をしているとの理由で、江戸十里四方追放の刑に処せられました。改革で弾圧された歌舞伎ですが、これほどの重刑を受けた役者は七代目だけです。幕府は当時の歌舞伎界を象徴する七代目を見せしめとして重罪にしたといえます。

天保 13 年 (1842) 南町奉行鳥居耀蔵から出された江戸十里四方追放の申し渡し文には、「深川嶋田町　熊蔵地借　十兵衛方同居　同人父　歌舞伎役者　海老蔵」と記されています。海老蔵は七代目の後の名です。舞台上での華美な衣装や小道具だけでなく、木場の自宅の造作や庭の御影石の燈籠まで、公私共に弾圧の対象となりました。図2は七代目が住んだ自宅を描いています。江戸を追われた七代目は厚く信奉する成田山に1年間逗留し、その後上方や九州の芝居小屋を巡業し、約 8 年後に江戸に戻りました。團十郎が代々住んだ木場の自宅は、大正 13 年 (1924) に消失したと言われます。

このように、深川を舞台に活躍した團十郎は、最も深川とゆかりのある役者と言えます。深川永代寺は、明治元年（1868）明治政府による神仏分離令による廃仏毀釈で取り壊され、明治 11 年（1878）その跡地に現在の深川不動堂が建立されました。境内に隣接する深川公園には、團十郎ゆかりの石造燈明台が残されており、團十郎が深川に残した足跡を感じることができます。

（主な参考文献）

渡辺保「四代目市川団十郎」（筑摩書房 /1994）
服部幸雄編「市川團十郎代々」（講談社 /2002）
木村涼「七代目市川團十郎の史的研究」（吉川弘文館 /2014 ）